日ロ交流

発行　：特定非営利活動法人　日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel：03（5563）0626　Fax：03（5563）0752

2017年新年会開催

滝波 秀子

厳しい寒さの続く日々、この日は春の訪れを感じさせるような1日であった。1月27日(金)午後1時よりParty for Eternity銀座店で行われた。平日であったために出席者は限られていたかもしれない。しかしロシア大使館関係の方々、その他当協会と友好関係の団体から多くの方々にお出で頂き、実に和やかな素晴らしい会となった。受付は春日井義弘さん、岡崎好典さんが担当された。出席者は招待者、会員、一般者を合わせて45名であった。内堀専務理事が進行係を務められた。朝妻副会長の音頭により乾杯は会場を賑わした。

有馬会長（左から2人目）を囲んで

始めに、有馬朗人会長からの挨拶があった。当協会のこの一年、そして未来への展望に目を向けた内容が実に適切なので、冒頭のお言葉を越えて、ここにお伝えしたい。

「ご承知の通り、昨年は日ロ国交回復の60周年を迎え、年末にはプーチン大統領の11年ぶりの訪日もあり、久しぶりに日ロ関係が活発となる明るい兆しが見えた年でありました。

当協会におきましても、昨年は日本の伝統文化をロシアの各都市で紹介する日本文化交流団を2度にわたり派遣し、エカテリンブルグ、クラスノダールはじめロシア5都市の教育機関などで文化交流活動を行い、各地で高い評価を得ることができました。また、日本国内においては、ロシア大使館、通商代表部の方々を含め、活け花、友禅、折り紙、マトリョーシカ絵付け教室など日ロ伝統文化交流、日本語ロシア語教室、ロシア留学支援、経済文化などの分野の講演会、アウトドアー交流など、多くの学生が参加した幅広い交流活動を実施し、日本とロシアの民間レベルでの草の根交流を深めることができました。

本年は、科学政治経済文化含む幅広い分野での日ロ両国間の交流の進展が期待されております。当協会と致しましても、民間の草の根文化交流を通して、日ロ両国市民の相互理解、親善をより深めることに少しでも貢献できればと祈念しております。

ビリチェフスキー公使

本日ご臨席頂いた皆様には、本年も引き続き当協会の活動に対しご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げるとともに、日ロ両国の友好的な交流の一層の発展を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。」

そしてこのあと、ロシアの原子力技術について言及され、日本ではもんじゅは廃炉が決定されたが、ロシアではその研究に成功しており、日本はその高度の技術に学ぶべきというお考えを示された。

ロシア大使館D.A. ビリチェフスキー公使は公務のため遅れてお出でになり、ご挨拶を頂いた。日ロ関係の発展のために日ロの民間交流が最も大事だ、ということを軸において話され、日ロ交流協会の役割が重要となるのでその活躍に期待したいという旨のお言葉もあり、貴重な展開に深い感銘を受けた。

新年会には常日頃顔を合わせることのない方にお目にかかるという喜びがある。その一人に15年もサンクト・ペテルブルグにお住まいの田中美穂子さんがいらした。彼女は協会のロシアへの留学生のサポートをして下さっているのだ。その他日本ロシア学生交流会の木村幹事長、ロシア語教師スニトコ・タチアナ先生、コルド・ナターリア先生もお出でになり、お話しに花が咲く。

このようにして2017年の楽しい新年会はその幕を閉じた。

（常任理事）

お知らせ

●日ロ交流バスツアー

但し、会員のみとさせていただきます。

日時：2017年2月25日（土）～26日（日）
場所：水戸偕楽園、鹿島神宮、成田山、つくばエキスポセンター等
費用：20,000円
＊詳細は事務局までお問い合わせください。満員になり次第締め切りとさせていただきます。

●ロシア留学体験懇談会

日時：2017年2月18日(土)　14:00～16:00
会場：港区立青山生涯学習館学習室3. 港区南青山4-19-7
銀座線・半蔵門線・千代田線表参道駅A 4出口徒歩8分
会費：会員1,000円、会員学生500円、一般1,500円、一般学生1,000円

●待望の講演会のお知らせ

『日ロ交流の歴史―隣人として400年』

日ロの友好を目指す協会員にとって必須の日ロ近・現代史を、この道の第一人者中村喜和一橋大名誉教授に「渾身の150分講演」をしていただきます。ご期待ください。

日時：3月25日(土)　14:00～16:30
会場：日比谷図書文化館　4Fスタジオプラス
(丸の内線・千代田線・日比谷線霞ヶ関駅・三田線内幸町駅)
会費：会員2,500円　一般3,000円　会員学生1,500円　一般学生2,000円　日ロ友好団体会員2,500円
申込:会員／一般／学生・氏名・電話・E-mail等明記の上、E-mail・FAX・郵便等で協会事務局まで。
スタッフ募集：080-4325-9981、simatac@kzh.biglobe.ne.jp

12月23日日和田山啓明荘に於ける餅つきハイキング

タマラ・ソイキナ

日ロ交流協会常任理事の益田さんよりお餅つき体験にお誘いいただいてから、人生初めての餅つきが出来る日を大変楽しみにしていた。ロシアには年末年始の休みの間に伝統的な家庭料理はあるが、お餅に似たような食べ物はない。

今まで約5年間の日本での生活の中でお餅を食べた経験は数多くあり日本食として好きな食べ物の一つであったし、また餅つきの様子も写真や動画で見たことがあったので、ぜひ一度自分で餅つきを体験してみたいと思っていた。しかし当日は餅つき以外にも数多くの貴重な経験ができた。それらは大別して次の3つになる。

１、本格的なハイキング

駅で電車から降りてから30分ほど森の中を歩いた。森の中は少し涼しくて、緑が溢れる大自然の中、足下に気をつけながら歩いたことで眠気も日々の疲れも消え非常にリラックスした気持ちになれた。

２、お餅つき体験

お餅はお米から作られているということは知っていたが、実際にお米が杵と臼によってお餅に変わっていく様子をみて、これまでわらび餅やきなこ餅を食べていた時、きなこ餅はお米にはないほど甘いがお米を食べていたのだと改めて実感した。お餅つきに関してのもう一つの発見は、おろし大根と醤油のお餅である。これまで甘いお餅しか食べたことがなかったが、辛みとも非常に相性がいいというのは意外で、新鮮な感覚で楽しむことが出来た。自然の中で食べる豚汁や、温かくて美味しい緑茶も格別だった。

３、国や世代を越えたコミュニケーション．

様々な年齢や背景を持った人たち同士が日ロ交流という共通目的だけでかかわり合えることは本当に貴重なことだ。例えば以前イベントに参加していた日ロ交流協会会員の11才の息子さんと会話をしていたとき、日本の学校に通ったことのない私は日本の小学校について沢山教えて頂いた。授業の内容、最近の小学生で人気な遊び、給食と習い事について色々楽しくお話が出来て大変勉強になった。そして、ウラジオストクにいる私の弟と同じオンラインゲームで遊んでいることを知った。そこで二人をネット上で紹介した。国は違っても子ども世代の興味の対象や友だちになる感覚は似ていて信頼関係を作れるのだということを感じた。

日ロ交流協会で日本の文化に触れられることは、私たちロシア人にとって非常に貴重な機会である。しかし本当に重要なのはロシア人と日本人がそれをきっかけにお互いに関心を持ち、交流を通じお互いを理解しお互いの文化や生活を理解し合うことだと思う。そのような交流をきっかけに、その後に仕事やプライベートで深く付き合える友人関係を築くことができるようになれば、これほど素晴らしいことはない。

日ロ交流協会で行われるこのようなイベントは日ロの相互理解、ひいては友好親善の促進につながる価値あるものと考えるので、今後とも日本文化を幅広く紹介していく活動が行われていくことを強く要望します。最後にこのような貴重な体験の機会を与えていただきました協会関係者の皆様に感謝申し上げます。協会の益々の発展を祈願します。（極東連邦大学卒、日系投資会社）

第3回マトリョーシカ教室作品展示会

千葉　麻里

TV取材中、見学者に説明するエレーナ先生

2016年12月7日～8日に神保町の書泉グランデにおいてマトリョーシカ絵付け教室の3回目の作品展示会が開催された。今年はエレーナ先生の発案で、会場での実演にプラスして体験教室も実施。しかも、先生の作品売り上げ収益を認定NPO法人カタリバを通して地震で被災した子ども達の学業支援に送られることとなった。そういった子ども達の何か役に立ちたいという先生の強い思いが伝わってきた。

生徒さんたちの作品もますますバリエーションが増えてそれぞれの個性が光る楽しいものだった。同じ教材でも色づかいも模様も全く違ったものになるのは不思議なくらいだ。また、今年はクラスノダールでの日本文化交流で仕入れたロシアのチョコレートやクリスマスカードも安価で展示即売し、ロシアの紹介に一役買った。体験教室が好評で、そのまま引き続き協会の絵付け教室に顔を出してくれた方々もおり、賑やかになって部屋が狭く感じられるほどだった。2日目には飛込みでフジテレビの取材があり、後日、今度はNHKが先生の教室を取材して「10年前から日本に滞在、マトリョーシカを通して日ロ交流のロシア人女性」とテレビで紹介してくれた。プーチン大統領来日のタイミングだったこともあるが、今までのエレーナ先生の努力が少しだけ報われたように思う。

日頃、教材を安く提供してくれているロシアンティの岩橋さんや、展示会でおなじみになった書泉グランデの平井さんにはポスター作成等でも色々とお世話になっている。善意の協力に支えられ、エレーナ先生の穏やかな誠実な人柄もあるからこそだろう。教室も今年は間もなく40回を超える。ちょっとだけのぞくだけでも、大切な1個を仕上げるだけでも、自分だけのマトリョーシカを作りに是非いらしてください。（常任理事）

●第38回マトリョーシカ絵付け教室：2月19日（日）
●第39回マトリョーシカ絵付け教室：3月19日（日）
時間：13：00～16：00
講師：菅野エレーナ
場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階造形表現室
会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）

講演会『トルストイの直弟子といわれた日本人―わが祖父小西増太郎』を聞く

ザベレジナヤ・オリガ

昨年12月10日「トルストイの直弟子といわれた日本人」という興味深い講演を聞かせていただきました。講演の主人公はトルストイ及びその家族と長い間付き合っていた小西増太郎という人物でした。私にとって一番印象的なのは、講師が小西の実の孫、吉橋泰男さんだということでした。講師自身の家族の物語でもあり、発表のテーマと発表者との深い絆が感じられました。小西は吉橋さんが生まれる前に亡くなっていましたので直接会っていなかったそうですが、若いころから祖父の行動に関心を持っていて長年研究してきたということでした。

昔、私がトルストイの屋敷ヤスナヤポリャーナを観光で訪ねた時、トルストイに日本人との交流があったという話を聞き、日本語を習っていた私にとって面白い事実でびっくりしたことを覚えています。しかし、日本人との関係が先生―弟子というほど密接だったことと、トルストイと小西が一緒に『老子』露訳を完成したということは私にとって新しい発見でした。また、小西はトルストイ家の夫婦喧嘩も聞いてしまうなど、よくトルストイの家に招待されてトルストイだけではなく家族との交流もあったそうです。

『老子』の翻訳は小西が直接漢文を、トルストイは英語、ドイツ語、フランス語訳を見て完成されたもので現代のことばでいうとたゆまない努力がかかった「プロジェクト」だったと分かりました。老子のことばを一つ一つ分析しそれに当てはまるロシア語を探すという細かい作業を一緒にやっていたトルストイと小西はどれほど親しくなったか想像できると思いました。

小西は日本でロシア正教の洗礼を受け、神田のニコライ神学校でロシア語を学んだ後ロシアに渡っています。小西の帰国後トルストイから送られてきた聖書には赤い線と青い線がいっぱい引かれていて線のないところは学ぶに値せずと書かれていたようです。このようにトルストイはキリスト教について独自の考えを持っていて、後年ロシア正教会から破門されることになります。どれほど小西に影響したかはわかりませんが、贈られた聖書は大変貴重なプレゼントだったと思います。

特に感動したのは、再訪後モスクワにいた小西がトルストイの葬儀に何としても参列したいと考えましたが、トルストイ・ファンが大勢集まることを警戒した政府と正教会の圧力で予定されていた特別葬儀列車が削られてしまい、一計を案じてシベリア行きの夜行列車で行く方法で結局みんなより早く着いたという話でした。葬儀に参列した唯一の日本人であったことも興味ある事実です。面白いことに講演が行われた12月10日はちょうど小西の亡くなった日で不思議な偶然だと思いました。

このように今回の講演は私にとって新しい勉強の貴重な機会になりました。これからも面白い講演を期待しています。

（モスクワ大学大学院アジア・アフリカ諸民族文化専攻博士課程卒・現翻訳家）

＜ペテルブルグ便り＞

サンクト・ペテルブルグのタクシー事情

大原　翔

成田から乗った飛行機がロシアの空港に着陸する頃、気になることがある。日本から一人で旅行して空港に降りてタクシーを拾い宿泊先に向うのはいつも気がかりであった。空港から市内までの足はあるのか。安全な車がすぐ見つかるかどうか、荷物も多く一人で運ぶのは厄介・・・。運転手に法外な価格を吹っ掛けられないだろうか・・。もちろん、日本で旅行会社に前もってちゃんとしたタクシーを予約しておいたり、空港に出迎えの人がある場合は、問題ない。飛行機が高度を下げてくるころ、タクシー料金などケチらず日本で予約しておくべきだったと、毎回、後悔したものだった。

2-3年前からであろうか、サンクト・ペテルブルクもモスクワ同様、そのような心配は無用となった。飛行機を降りて荷物を受け取るターンテーブル脇にタクシー予約のカウンターができている。値段も市内の目的地別に表示されており、リーズナブルで安全である。空港から市内まで約1000ルーブル前後（2000円未満）である。いわゆる雲助もいない。入国すると同時に、行列した雲助タクシードライバー歓迎を受けることも昨今はなくなった。

市内のタクシーはどうかというと、これも様変わりである。かつて、街中で急ぐ時は、市内の流しタクシー（というより白タクかもしれない）を利用せざるを得ない状況にあった。タクシー会社に電話してもなかなか来ない、その上、価格も安くない場合が多く、ついつい通りで手を挙げて白タクを探したことが少なからずあった。それも5年くらい前の状況であろうか。最近の経済状況の反映か、職にあぶれた人や中央アジアなどからの出稼ぎなどの運転手が多い。ほとんどのタクシーにはナビがついており、運転手は行く先へのルートを自分で考えることもなく、それに音声入力し客を目的地に運んでくれる。

タクシー会社の数は、多く、供給過剰で乱立している。タクシー会社の合併や企業買収も頻繁である。そのため、車を電話予約すると特別の日でもない限り、短時間で配車される。価格も以前より大幅に下がっている。電話で予約しなくとも、インターネットやアイホンで予約する人のほうが多いかもしれない。タクシー会社にインターネットでアクセスすると自分がどこにいて、その近くにタクシーがいるかどうかが地図で瞬時にわかる。もちろん何分後にタクシーが来るか、料金はどのくらいかもすぐにわかる。ロシア語の知識が全く無くても、また自分がどこにいるか分からなくとも、タクシーを予約し利用できるという世界になっている。

タクシー代金も前もって登録しておけば、クレジットカードで毎回署名せずとも自動的に支払いもできる。いかにロシアのＩＴ状況が進歩しているとはいえ、これには、若干信用性に疑問をもっており、私は毎回現金払いである。この場合、昔同様に、運転手が釣銭をもっていないことが多いのが難点である。乗る前に小銭があったかなと考えるのが、面倒である。御釣りがないときは、チップとして渡すか、あるいは、降車場所の近くの店などで両替を利用者（運転手ではなく）がしなくてはならない。この辺りは、昔と変わらない。（2017年1月記）

《モスクワ・アラカルト43》

制裁３度目のお正月が過ぎて

日向寺 康雄
Sputnik日本チーフアナウンサー兼翻訳員

欧米からロシアに制裁が課せられてから、三回目のお正月が過ぎた。昨年も一昨年もそうだったが、少なくともモスクワの市民生活には混乱も悲壮感もなかった。新年と降誕祭にはなくてはならないオリビエ・サラダや「毛皮を着たニシン」も、テーブルに例年通り並んだ。アルコール類も、ウオッカは比較的安くて申し分なく、アルメニアのコニャックも健在、ワインは高いフランスやイタリア物の代わりにクリミア産が多く出回り、グルジア産も復活、遠いチリ産も珍しくなかった。前菜のチーズなどはベラルーシ製だ。フルーツも豊富だった。オレンジはこれまで通りモロッコから、リンゴはセルビアから、インドのブドウやブラジルのスイカもあった。トルコ産フルーツも帰ってきた。エクアドルからはバナナ以外にニンニクも来た。野菜ではイランのキュウリやアゼルバイジャンのトマト、フランス系のスーパーには、西アフリカ・ベナンの玉ネギ、赤ピーマンなど新顔も登場した。一方ロシア人は、もうあまり中国製の野菜や果物を買わなくなった。残留農薬や品質管理が心配だからだ。とにかく店頭では、肉も野菜も穀類も、ロシア産が増えた。ソ連時代には想像もつかない事だったが、今やロシアは世界一の穀物輸出国であり、昨年はお米の生産が増え、輸出国に転じている。豊作で、日本のものに近いクバンのお米が２割ほど安くなったのは、我が家では大ニュースだった。

一方街では、テロ事件を警戒して、広場や地下鉄の連絡通路からキオスクやミニショップが、見事なほどきれいさっぱり姿を消してしまった。地下鉄駅出入口付近の市場も撤去された。新聞や雑誌を売っているキオスクは、まだかろうじて残っているが、不愛想な街の表情に明るい彩を加えていた花屋もめったにない。これには治安上の理由と共に、かつてオランダから大量に届いていた生花がロシア側の対抗制裁措置によって来なくなってしまった事も一因だ。また通りで、シャシリクやシャウルマ、ホカホカのジャガイモ等でちょっと腹ごしらえしようとしても、そうした屋台はもうほとんどない。祝祭日は、街は美しくライトアップされ、凝ったイルミネーションで飾られ、広場には民俗村のような仮設店舗が設置されて、ピロシキやブリヌィ、ピチェーニエ、ブリャンニキ、パスチラ、蜂蜜や薬草茶など極めてロシア風の食べ物や民芸品が売られ、楽しいマーケットも開かれるが、何となく生活感がない。

しかし市民に不満はあっても、エネルギー、食糧、軍事・治安上の安全を自力で保証する「体力」のある国は実に強い。忍耐の日々は愛国心を高め、国民を結束させている。西側による制裁で、最も辛いお正月を迎えたのは、もしかしたらEUの農民達とロシアの民主派ではなかったかとつくづく思う。その欧米社会が今年、極めて大きな変化を体験することは、恐らく避けられないだろう。

モスクワ「ムゼイ」巡り・その３

ロシア海軍博物館

大矢 温

内陸部のモスクワに「海軍」？という違和感が残るかもしれない。が、ともあれ、いまから10年ほど前の2006年の7月にモスクワ市内の住宅地からほど近いモスクワ運河の川岸に、このロシア海軍博物館（Музей ВМФ）がオープンした。

地下鉄のスホドゥネンスカヤ（Сходненская）駅で降りて東にかって５分ほど歩くとモスクワ運河沿いの公園の中にある。近づくにつれ、まず最初に異様な姿の飛行機が見えてくる。飛行艇「アリョーノク（子鷲）」だ。現役引退後、カスピ海から運ばれてきた実物だ。船首に２基の離水用ジェット、船尾のＴ字翼には巡航用のプロペラを備えた化け物のような機体だ。このほか、ホバークラフト「スカット（エイ）」も屋外展示されている。

しかしなんと言ってもここの目玉は1980年代に北方艦隊に配属されていたディーゼル潜水艦「ソーム（なまず）」（NATOコードTango class）Б-396だ。他では見ることのできないソ連の潜水艦の艦内を見学することができる。見学者用に設けられた船首の入り口から入ると、まず魚雷発射室。6本の魚雷発射管やそこから発射される魚雷が展示されている。通信設備や操作パネルのエリアを通って船の中ほどに進むとそこは士官用の居住スペース。台所ではコックさん姿のマネキンが迎えてくれる。さらに進むと動力室。よくわからない機械のわきを抜けていくと最船尾には乗組員の居住スペース。乗組員のベッドの横には出口が開けられている。ここから潜水艦を出ると、正面が博物館の屋内展示室。ここにはロシア海軍の歴史に関する展示物が陳列されている。

普段は決して目にする機会がないものばかりで、軍事オタクならずとも一見の価値があるものばかりだ。とはいえ、「サムライに死を」と書かれた魚雷（1945年８月にソ連が対日参戦した時のもの）を見ると、つくづく平和の大切さを感じずにはいられない。

（札幌大学外国語学部教授）

＊月曜は休館日、入場料は大人300ルーブリ。
https://goo.gl/maps/Q6pjKJSQYo52

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシアに関する講演会、在ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けております。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をよろしくお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。
振込先：郵便口座 00160-9-66486 加入者名：日ロ交流協会
連絡先：日ロ交流協会事務局　Tel:03-5563-0626
＊北澤法隆氏、関根禮子氏、内堀學氏、水口淳氏、岡崎好典氏よりご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。